

卒業する、いま

感謝と祈りが交わる、この季節。
旅立つ人と見送る人の「卒業する、いま」の想いを聞きました。

幼稚園教諭 橋本 治奈 / 赤坂 洋子

平和をつくりだす 人として

幼稚園の3年間、皆さんは毎日お祈りをして、讃美歌を歌ってきました。

「沢山遊べてありがとうございます」「お休みの友だちが元気になりますように」「地震の所にいる方をお守りください」「フィリピンの子どもたち※1が楽しく過ごせますように」「戦争が早く

終わりますように」など、自分のこと、友だちのこと、遠くの場所で起きていることやそこに住んでいる方たちのことを覚えて神さまにお話ししました。

年長組では韓国やモロッコからお客様をお迎えしたり、様々な国から来ている大学生の方たちと遊んだりして、国や言葉が違ってもすぐに仲良くなれることを知りました。そしてクリスマス礼拝では、40人で心を合わせて、次のような賛美をしました。

苦しみ悩みの中で 生きている人が 神さまの愛を求め 私を待ってる
だから心から愛し合い 地球に平和 つくりだそうよ
イエスさまを伝えよう イエスさまを伝えよう
この小さな私たちにも 何かできるはず※2

神さまに愛されて、幼稚園でいっぱい遊んだ皆さんが、これからも平和をつくりだす一人ひとりとして大きくなっていかれることをお祈りしています。

※1 幼稚園の子どもたちが献金先として覚え、祈っている、認定NPO法人チャイルド・ファンド・ジャパンを通して支援している子どもたちや、現地NGO法人ミンダナオ子ども図書館の子どもたちのこと

※2 新生讃美歌390番(作詞・作曲:福永保昭, 1989)

保護者会副会長 渋井 一華

卒園・進学に よせて

息子の卒園が近づき、幼稚園でのかけがえない日々が思い出されます。

年少では、先生方に見守られながら好きな遊びを見つけ、幼稚園が安心して過ごせる場所になりました。

年中では、時には意見をぶつけ合いながらもお友だちと関わるのが楽しくなりました。

そして年長では、同学年の40人が互いを思いやり支え合う中で、「友だち」から「仲間」へと絆を深めていきました。

一人ひとりが神様から与えられた、かけがえない存在である——キリスト教の教えにもあるように、先生方は子ども達の個性と人格を尊重してくださいました。おかげで子ども達同士も、相手との違いを認め、信じ合い、協力し合うようになり、その姿に大人の私も何度も心を動かされました。この3年間の大きな成長は、日々祈りをもって寄り添ってくださった先生方のおかげと心より感謝しております。

そして今、子ども達は初等部への進学を前に、新たな「仲間」との出会いに胸を膨らませています。幼稚園で培われたことが、次のステージでも子ども達の心を支えてくれますように。



初等部教諭 小林 寛

「沖へ漕ぎ出そう」

いつも喜んでいなさい。絶えず祈りなさい。
どんなことにも感謝しなさい。これこそ、キリスト・イエスにおいて神があなたがたに望んでおられることです。(1テサロニケ5:16~18)

卒業という節目を迎えて希望と不安がごちゃ混ぜになっているかな。未知の世界に飛び込むとなると普通は不安が大きくて身構えおびえるのですが、多くの仲間と中等部という同じ学校に進む皆さんの中には、電車を乗り換える程度のものだよと、軽く感じている人がいるかも知れません。もし、そうだとしたら残念です。

住み慣れた初等部に別れを告げて、これから出会う新しい仲間、新しい指導者に会えるこの卒業という節目を、自分を大きく成長させるきっかけとしてほしいと強く願います。

それには、この変化という海に一人乗りボートで漕ぎ出す決意を持つことです。行き先を自分で決め、ボートのオールを一人で漕ぐ。平戸での遠泳を思い出してほしい。泳いでいる仲間の姿は見えるけど、泳ぐのは自分の力だったはずです。潮の流れを体で感じ、波に翻弄されてもゴール目指して諦めずに泳いだあの感覚こそ、みんなを次のレベルに引き上げる原動力になるでしょう。

挑戦する機会をもらったことを喜ぼう。小さな不安が芽生えたらすぐに祈ろう。自分をいつも見守ってくださる神様に感謝しよう。この3つを神様はあなたに願っています。

新しい世界で揉まれて逞しく成長した君たちに、いつか再会することを楽しみにしています。



初等部6年 藤原 花実

日常に感謝して



私が初等部に入学したのは2020年、ちょうどコロナ感染症の流行が始まったときです。

入学式は夏服を着用して6月になってからでした。その後も16人ずつの分散登校、32人揃って授業が始まったのは2学期からでした。制限された学校生活が続く、日常が戻り始めたのは4年生の頃でした。米山記念礼拝堂に全校生徒が集まり、初めて全員で讃美歌を歌った時の響きは今でも忘れません。この感動から、宗教プロジェクトに入りました。給食も1人ずつ前を向いて食べる黙食から、机を向かい合わせて友人と一緒に楽しい会話をしながら食べられるようになりました。

朝「いってきます」と家を出て学校生活を送り、「ただいま」と自宅に帰る日々の日常がどんなに有難いことなのかと実感しました。

神様はこのような形で不便な生活が続く中から、私に気づきを与えてくれました。毎日の礼拝を通して神様に心を向け、いつも見守ってくださることに感謝をしたいです。苦しいときや困難な状況でも、神様を信じて、その時できる最善の努力をして進んでいきたいです。



中等部教諭 横山 道行

「神ともにあいまして」



77期生の皆さん、中等部ご卒業おめでとうございます。皆さんの門出を心から嬉しく思います。

入学式での挨拶やウェスレーホールニュースを通して、私は77期の皆さんに「7」が持つメッセージと



共に、中等部での生活と学びを通して「なりたい自分」を見つけ、目標に向かってさまざまなことに挑戦してほしいとお話してきました。時に悩み、迷いながら歩んだ中等部での3年間はいかがだったでしょうか。日々の思い出と共に、その時々での心の変化や自分の新たな一面との出会いがあったことも大切にしてほしいと思います。

私は、成長や変化に必要なものの一つに「出会い」があると考えています。77期の皆さんは、中等部での生活を通してどのような出会いを重ねたでしょうか。その中には、いつも私たちと共にいてくださる神さまとの出会いがあったことを、卒業後も心に留めておいてください。

4月からそれぞれの新たな一步を踏み出す皆さんに、神さまが共にいてくださり、行く道が守られることをお祈りしています。

中等部3年 小島 和夏

「仲間と進む」ということ

私はこの中等部で多くのことを学ばせてもらいました。その中で、一番印象に残っているのはハンドベル部での活動です。入部したとき1年生は1人だけで、日々緊張するばかりでした。でもそんな時、先輩方がいつも助けてくれました。私が1年生だった時の部長の先輩は、私の憧れでした。私には到底及ばない、輝きを放つ先輩でした。いつも慢心することなく、後輩たちのことも褒めて伸ばしてくれて、感激したのを覚えています。

3年生になり、私自身が部長という立場になって、それももう終わろうとしています。憧れの先輩のようにはなれていないと思いますし、右も左もわからず大変なことももちろんありました。でもいつだって後輩たちに、先輩たちに、助けられて乗り越えてきました。

一人より二人のほうが幸せだ。共に労苦すれば、その報いは良い。
一人が倒れても、もう一人がその友を起こしてくれる。
倒れても起こしてくれる友のない人は不幸だ。(コヘレト4:9~10)

この3年間、この聖句のように、ハンドベル部みんなの力で、様々な試練を乗り越えてきたと思います。この経験を糧に、高校生になってからも前に進み続けていきたいです。



高等部3年 井上 舜輝

「仕える主将」としての一年

私は一年間野球部の主将をしていました。楽しく幸せな時間でしたが、部員をまとめる立場として辛いことも多くありました。その中で、主将になってしばらく経った冬頃から意識しだした考えがサーバント・リーダーでした。体育会系の部活はどうしてもトップダウン型になりやすく上から押さえつけたほうがやりやすいことも多くありましたが、私はチームメイト皆に仕えることを信念として過ごすようになりました。例えば、朝に少し早く練習場所に行って皆

の分の道具を準備したり、同期や後輩に意見を求めながら練習を考えたりすることを意識しました。このことにより、周囲に気を配り、対話することで個々の考えを知ることが出来るようになりました。クリスチャンホームで育った私は、幼少期から教会で聖書に触れる機会があったため、サーバント・リーダーという言葉は知っていましたが、青山学院で過ごした学びの日々によってよりはっきりとリーダー像が形作られました。これからもこの経験を活かし、皆を支える人を目指します。



高等部教諭 山元 克之

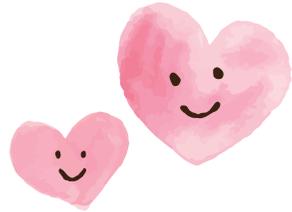
「意識の種」が芽吹くように

私は今年度、ラグビー部の顧問を務めました。「何を意識しているか」とコーチに問われ練習をする部員たちの姿を見ました。昨年度までの陸上部でも、微細な感覚を意識することで、走りの質が変わるのを目にしました。同じ動作、同じ練習メニューであっても、意識の有無が結果を分ける。そのことを、私は皆さんから教わりました。



私たちは、意識せずとも日々を過ごすことができます。しかし、どう生きるかを意識した瞬間、人生は鮮やかな彩を放ち始めます。野球部主将の井上さんが、「サーバント・リーダー」を意識したことで周囲との絆を深めたように、在り方を意識することで同じ生き方でも輝きが違ってくるのだと思います。

この学び舎には意識の種が溢れていました。「サーバント・リーダー」や、「地の塩、世の光」をはじめとする聖書のみ言葉。それは一人ひとりの人生を内側から照らす意識の種です。卒業していく皆さんの心に蒔かれたその種が、新しい地で豊かに芽吹き、それぞれにしか成し得ない輝きを放つことを心から祈っています。

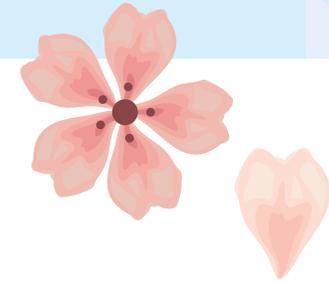


総合文化政策学部教授 茂 牧人



「人材につきない人間性を」

皆さん、ご卒業おめでとうございます。さて創世記の人間の創造の物語を振り返ると、そこにはとても大事なメッセージが込められていることがわかります。創世記の人間の創造物語は2つあります。1つ目は、神様が、人間を「自分のかたちに創造された」(創世記1:27)ことです。それは人間を「神の似姿」として捉える捉え方へと発展し、そこから「人間の尊厳」が導かれました。さらにもう1つは、神様が、人間を土の塵で形づくった後、「その鼻に命の息を吹き込まれた」(創世記2:7)のでした。そこから人間は、神様に対して応答できる、つまり、拒絶もでき、従うこともできる自由の存在者となりました。今大学は、人材教育が求められています。しかし、人材というのは、このような神様から創造された自由と尊厳をもった人間の人間性のある一側面ではありません。青山学院の教育は、キリスト教信仰に基づき、もっと奥行きのある尊厳と自由をもった人格全体を捉えることを追求してきました。皆さんが、今後このように尊厳と自由を大切に、神様と共に歩いていける人生であることをお祈りしております。



総合文化政策学部4年 松島 優希

「blessed」

キャンパスで過ごした4年間と異国の地で暮らした1年間、5年の月日は長いようであったという間でした。

SNSによって、自分や他人や物事の一面だけにフォーカスされがちなこの時代に、自分の全てを知ってもらえなお愛してくださる神様とキャンパスの中でたくさん時間を過ごせたこと、その喜びを知る友達と色々な時間を共有できたことが大学生活の中で1番の恵みです。正直たくさん失敗しましたし、勇気を振り絞れない場面も多々ありました。今もなお未完成ですが、大学生活に後悔はありません。一つ一つの出会いが、景色が、心の動きが今の私をつくっていて、入学した時は持っていなかったものを今はたくさん持っています。

在校生の皆さん、ぜひ行動してください。心が躍る方を選んでください。私たち人間はミスすることもある。でも神様は絶対にミスをしません。だから大丈夫です。神様を信じて進んでみてください。そしてあなたにとって世界はどうだったか、神様の愛はどうだったか、ぜひ教えてください。

God bless you!

